

小グループの学習者の発表に対するフィードバックの分析

—日本語授業のビジターセッションを対象に—

大場 美和子（昭和女子大学）

山本 綾（東洋大学）

竹田 らら（東洋大学）

松橋 由佳（テンプル大学ジャパンキャンパス）

要旨

本研究の目的は、米国大学日本校における日本語授業のビジターセッション（中上級学習者 11 人，日本人学生 15 人，90 分）を対象に，小グループにおける学習者の研究発表後の日本人学生のフィードバックに着目し，フィードバックの内容と，日本人学生と学習者やり取りの特徴を明らかにすることである。分析対象は 7 つのフィードバックで，まず内容区分（質問，感想，提案）により，提案が約半数を占めていることがわかった。次に，会話データから，日本人学生には共話的な話し方，配慮表現の多用，非言語行動の使用，短い発話での繰り返しや相談による提案が観察された。一方，学習者は，提案に対する応答やその理由の説明が不明瞭であった。以上より，参加者双方に対して，提案の産出と理解に関する事前事後指導を行うことで，ビジターセッションの効果を高める必要があると考える。

【キーワード】 フィードバック，提案，米国大学日本校，ビジターセッション

Keywords: feedback, suggestions, American university in Japan, visitor session

1 研究の目的

テンプル大学ジャパンキャンパス（TUJ）は，日本にある米国大学であることを活かし，日本語の授業では日本人学生のビジターセッションが行われて

いる。その 1 つに、学習者とビジターで小グループを作り、学習者が自身の研究課題の中間発表を行い、ビジターがその発表に対してフィードバックを行う活動がある。この活動では、日本語の不自然さや発表のスライドのわかりにくさなどについて、ビジターが学習者に配慮しながらも具体的に伝える様子が観察される。これに対し、学習者は聞き手として反応しており、表面上はビジターとやり取りを継続しているが、学習者がフィードバックをどのように受け止めたのか不明瞭なことがある。また、学習者には、ビジターからのフィードバックを踏まえて最終発表とレポート執筆に繋げるよう指示しているが、このフィードバックが活かされていないこともある。TUIJ の学習者は日本在住で日本語母語話者との接触場面にもある程度慣れており、表面上のやり取りを継続することはできているが、ビジターセッション後に行われる最終発表とレポート執筆に、ビジターとのやり取りを効果的に繋がられていない実態があるといえる。

以上を踏まえ、本研究の目的は、米国大学日本校における日本語授業のビジターセッションを対象に、小グループでの学習者の研究発表後の日本人学生のフィードバックに着目し、フィードバックで何が話され、日本人学生と学習者の間でどのようなやり取りが行われているかを明らかにすることである。これにより、学習者がビジターセッションでのやり取りを踏まえて発表やレポート執筆を自ら改善・改稿できるように、事前事後の指導のありかたについて検討したいと考える。

2 先行研究

本研究で対象とする学生同士の授業でのやり取りに関連し、米国大学でのグループディスカッション、日本の大学院のゼミの話し合い、大学生の面接調査場면을対象とした先行研究から、大学生の多人数での制度的な場面におけるやり取りの特徴についてまとめる。

Watanabe (1993) は、日本人学生同士（使用言語日本語）と米国の学生同士（使用言語英語）のグループディスカッションの違いを 3 点指摘している。

対象は、4人による7グループ（米国4，日本3，20分，録音）で、両グループとも同話題についてディスカッションを行っている。日米の違いとして、1点目に、ディスカッションの開始と終了において、日本人学生は参加者間でディスカッション自体の前にその進行についても話すのに対し、米国人学生はすぐにディスカッションを開始するとしている。2点目に、理由の説明では、日本人学生は物語のように詳細を語るのに対し、米国人学生は要約して端的に話すとしている。3点目に、賛否の分かれる議論の場合、日本人学生は複数の立場を説明するのに対し、米国人学生は単独の立場を説明するとしている。Watanabe (1993) は、日米の母語場面を対象にしているが、接触場面の場合、双方の母語のディスカッションに関する期待と言語能力の違いが、やり取りに影響すると考えられる。

嶺川 (2001) は、大学院のゼミにおける発表後の質疑応答に着目し、日本語母語話者が聞き手の場合に、共話と対話（水谷 1993）を使い分けていることを指摘している。分析対象は、90分のゼミ4回（教師2人（交代で担当）、日本人学生3人，留学生3人，録音）で、7つの質疑応答を質的に分析している。分析の結果、日本語母語話者は強い共話の傾向を見せたものの、対話の傾向も全員に観察されたとしている。具体的には、「共通理解を前提とせず」「見解に関わる話題」で、「その見解が話し手自身のものであり」、さらに「その見解が話し手自身のものであることを主張している」場合にのみ対話的な話し方に切り替えると指摘している（嶺川 2001:39）。嶺川 (2001) は、日本語母語話者の対話的な話し方の切り替えの条件を具体的に提示しているが、それは非常に限られた場合であり、ほとんどの場合、相手と協力して話を作り上げようとする共話的な話し方であると指摘している。

熊谷・木谷 (2006) は、1人の調査者と2人の回答者（友人同士の大学生）による面接調査場面を対象に、回答者間に相互作用が発生することに着目している。分析対象は、3件の面接調査場面（各15分，録音）である。回答者間の相互作用を質的に分析し、①同意要求・情報確認と②それへの応答、③もう1人の回答へのコメントと④それに対する応答・反応、⑤互いの

発話を踏まえた回答，⑥もう 1 人の回答への相づち・反応の 6 種類が全データで観察されたとしている。通常，面接調査では，調査者の質問と回答者の回答という相互作用が基本であり，2 人の回答者間の相互作用は逸脱的とも捉えられる。しかし，2 人の回答者間の相互作用は調査の遂行を混乱させるものではなく，調査者・回答者の双方から回答行動として位置づけられ，回答行動のサブタイプとして機能していたと指摘している。

Watanabe (1993)，嶺川 (2001)，熊谷・木谷 (2006) は対象とするデータは異なるが，多人数会話による参加者間の役割関係が明確な制度的談話である点は，本研究のビジターセッションと共通する。よって，本研究のデータでも，Watanabe (1993)，嶺川 (2001) の指摘する日本人学生の共話的な話し方が出現すること，日本人学生が複数であれば熊谷・木谷 (2006) の回答者間の相互行為と類似のやり取りも出現することが予測される。ただし，本研究のビジターセッションでは，日本語を使用言語とした接触場面であり，学習者の日本語能力は大学院生ほどではなく，ゼミほど人間関係は確立していない。ビジターの日本人学生の共話的な話し方と日本人同士のやり取りが発生した場合，学習者とはどのようなやり取りとなり，ビジターセッションにおいてその両者のやり取りがどのように機能するのか疑問が生じる。そこで，本研究では，ビジターセッションでの小グループにおける学習者の研究発表後の日本人学生によるフィードバックに着目し，そのやり取りの実態と機能を明らかにすることを研究課題とする。

3 調査の概要

分析対象は，TUIJ の日本語専攻の最終学年対象のレポートライティングの授業である（2024 年，週 2 回全 25 回，各 90 分）。本授業では，学習者（11 人，中級～中上級）が各自の研究課題に関する調査を行い，ビジターセッションに参加した上で，最終発表を行い，8～10 ページのレポートを執筆する。授業では，書き言葉のスキル向上，論文作成能力，思考力，問題の分析・解決能力の養成が目的である。ビジターセッションは 2 回実施され，1 回目は研

究課題について学習者がビジターにインタビューを行い、2 回目（分析対象）は学習者が研究成果の中間発表を行う。

2 回目のビジターセッションでは、学習者（F）11 人とビジターの日本人学生（J）15 人の混合で小グループ（2～4 人、J は授業時間の違いで早退者あり）を作った（2024 年 11 月、録音録画）。約 20 分で小グループ内の F の発表とフィードバックを行う活動を 1 回とし、小グループのメンバーを入れ替えて同活動を 3 回行った。このうち、1 人の発表とフィードバックまでを 1 つのデータとし、音声・映像が良好な 7 データを分析対象とした。表 1 は、各データの参加者（発表者，受け手（F，J））と発表内容をまとめたものである。

表 1：参加者（発表者，受け手（F，J））と発表内容

データ	発表者	受け手 F	受け手 J	発表内容
データ 1	F1	F2	J1	日本の農業
データ 2	F2	F1	J1	日本人のアイデンティティ
データ 3	F3	—	J1	田舎暮らし
データ 4	F4	F8	J1	LGBTQ の選挙権
データ 5	F5	—	J2, J3	日中のコンビニ比較
データ 6	F6	—	J2, J3	SNS の悪影響
データ 7	F7	—	J2, J3	日本人の宗教観

グループ内の F 同士の親疎関係には違いがある。J のビジターセッション参加の経験も異なり、J3 は初参加、J1 と J2 は以前にも参加したが、グループのメンバーは異なる。なお、F は TUJ 所属で日本在住であり、滞在期間に差はあるものの、基本的には日本語母語話者との接触場面には慣れている。

4 分析

4.1 フィードバックの内容区分の分析

まず、フィードバックのやり取りで何が話されているかを見るため、やり取りをその内容から区分した結果、質問・感想・提案に分類された。さらに、発表者 F がその質問・感想・提案を、受け入れたのか（受入）、拒否したのか（拒否）に大きく分類し、その受入と拒否の判断がつかないものをその他として区分した。表 2 は、質問・感想・提案別に、受入・拒否・その他を集計した結果である。

表 2：フィードバックの内容区分と結果の集計

	受入	拒否	その他	合計
質問	0	0	1	1
感想	11	0	2	13
提案	7	4	9	20
合計	17	4	12	34

表 2 より，フィードバックでは，提案が半数以上（20/34）を占めるものの，その提案に対する反応は，受入とも拒否とも判断のつかない「その他」が約半数（9/20）を占めることがわかる。これは，感想の受入が 8 割を超えている（11/13）のとは対照的である。フィードバックにおいて J から F の発表に対する提案が行われていても，結果として，その提案の約半数のやり取りの結果が不明瞭であったといえる。

4.2 ビジターの提案におけるやり取りの分析

提案における J の発話を観察すると，断定緩和の機能を持つ配慮表現（野田 2024）を多用し，短い発話で繰り返しながら，非言語行動も合わせて提案を行っている。断定緩和とは，「かもしれない」のように，断定を緩和する機能を持つ表現である（野田 2024:11-12）。また，小グループに J が 2 人いる場合，その 2 人のやり取りにより，継続的に提案を行う様子も観察される。これに対し，F には，J の提案に対する聞き手行動は観察されるものの，実質的な発話による提案への応答が観察されないことがある。以下，会話例¹とともに，J の提案がビジターセッション後の F の最終発表とレポートに反映されたかどうかについて述べる。例番号に続いて，データ番号の下位区分，提案の内容とその結果（受入，拒否，その他）を記述している。

例(1)は，J1 が F4 の発表内容に関連づけて，選挙の投票率を上げる具体例を提案している。J1 は，笑いと断定緩和の配慮表現（みたいなの，とか，かな，っていう，など）を多数使用し，短い発話で共話的な話し方（水谷 1993，嶺川 2001）をしている。一方，F4 には，聞き手行動のうなずきやあいづちは観察されるが（19F4，21F4，23F4，25F4，27F4），J の共話的な話し方と類似の

発話、J の提案に対する態度を明確に示す発話は観察されない。結果的に、J1 の比較的短い発話が継続し、提案に対する F4 の態度は不明瞭である。最終発表のスライドとレポートにも、提案内容は反映されていなかった。

例(1)データ 4-1 提案（内容の具体案）→その他

18 J1 SNS、でーそういうなんか、行くとー、こうなるよみたいな

19 F4 うん（うなづき 2 回）

20 J1 そう、行くとーカラオケい、無料みたいな（笑）

21 F4 （うなづきながら）あ、そう [ですね

22 J1 [映画無料とかそういうのを一、一緒に発信↑

23 F4 うん（うなづき 2 回）

24 J1 していったらもっといいのかなーってというのが

25 F4 （うなづき 2 回）そう [ですか

26 J1 [思いました

27 F4 うんうん

28 J1 かな↑

例(2)は、J3 が「サービス態度」という F5 の表現の不自然さを指摘し、表現の修正を提案している。J の特徴として、短い発話の繰り返し、2 人の J 同士のやり取り（熊谷・木谷 2006）によって提案を行っていることが指摘できる。具体的には、「サービス」の繰り返し（28J3-32J3）、2 人のやり取りとしては、J3 が J2 に「どう↑」（27J3）、J2 も J3 に「言わないよねどうすればいいんだろう」（31J2）、「どうこの差」（33J2）、「どう↑」（34J2）と問いかける発話を向けている。この J 同士のやり取りに対し、F5 は発話のないまま傍参与者となり、沈黙が発生し、最終的に F5 の態度は不明瞭な状態で提案は終了する。J2 と J3 のやり取りが継続し、F5 には提案であることが理解されていない可能性もある。最終レポートにこの提案は反映されていなかった。

例(2)データ 5-3 提案（表現の修正）→その他

27J3 サービス態度ってあんま言わなくない、どう↑

28J3 サービス

29J2 サービスについてでもいい気がするんだよ

（沈黙 2 秒）

30J3 サービスや、態度、[じゃなくて、サービス

31J2 [サービス態度とは言わないよね

え、どうすれはいいんだろう

32J3 サービス

33J2 ×××さまですよね、どう、この差、私はちょっと引っかかった

（沈黙 20 秒、F5 足を小刻みに動かす）

34J2 どう↑

35J3 （笑）

例(3)は、J3 がスライドの字体の混在を指摘し、フォントの統一を提案している。J の特徴として、J が 2 人で非言語行動も使いつつ、2 人のやり取りによって提案を行っていることが指摘できる。具体的には、J3 はスライドを指さして字体が異なる部分を F5 に説明し、J2 もスライドを指さして同調して提案を行う(87J3-93J3)。これに対し、F5 はソフトの問題であると反論し(94F5, 101F5)、この提案を拒否する。ただし、「え、これも多分 iPad の」(94F5)という中途終了の発話で、十分に理由を説明しているとは言えない。最終発表時のスライドでも提案は反映されていなかった。

例(3)データ 5-9 提案（字体の修正）→拒否

87J3 あーと、なんか、明朝体からゴシック体になってたり、とかしたところ
があって、あの、字がね、ちょっと、動かしてもいいですか、／なんか

88F5

うん

- 89J3 字がなんかの〔(字、うーん)
90J2 〔この辺じゃあ(わかんない)
91J3 あ、〔こことかね
92J2 〔その辺
93J3 ちょっとこれ、字体が違うの分かりますか↑
94F5 え、これも多分 iPad の
95J3 あー(笑) これだからか
96F5 あー
(略)
101F5 マイクロソフトじゃない、これ中国のなんか、(ダブル) みたいな

例(4)は、F6 が作ったスライドの色について修正の提案が J2 から行われ、F6 が白黒のままにする理由を述べている。先行するデータ 6-5 で一度同様の提案が行われて曖昧に終了し(その他)、同じ提案が再度 J2 から行われている。ここで F6 は色を変えない理由を説明するが(134F6, 136F6)、言いよどみが多く発生している。不同意表明の理由を説明する発話では、流暢性が低くなる様子が観察される。J2 は継続して部分的な色の修正を再提案するが(152J2-158J2)、F6 はうなずくだけで(155F6, 157F6)、最終発表時のスライドでも提案は反映されなかった。F6 は、発表の際には、ゆっくり発話することを J3 から提案されており、常に非流暢性が発生するわけではない。

例(4)データ 6-7 提案(スライドの色の修正)→拒否

- 134F6 あの、あるし、えーとー、ぜん、あの、全部のスライド、あの、こちらのスライドと、最後のスライド以外に、あの、ぜん、あの、全部はこの色のためは、あの、色、色
135J2 うん
136F6 のあれは、えーと、少し、えっと、モノトーン
137J2 うん

138J3 うん

139F6 のように感じると思いますから

140J2 うん

(略)

152J2 質問のところだけを

153J3 (笑) うん

154J2 色変えるとかでも、

155F6 うん

156J2 多分、言いたかったことだと

157F6 うん

158J2 思うんだけど

例(3)(4)の両方において、Fの提案に対する不同意の理由の説明が充分にはできていなかった。母語場面であれば端的に説明できる可能性もあるが(Watanabe 1993)、本データでは非流暢性も伴い、提案に対する態度も明確ではない。接触場面では、予定通りとはいかない質疑応答において、相手に理由と共に立場を説明する練習が求められると考えられる。

5 考察と結論

米国大学日本校の日本語の授業におけるビジターセッションを対象に、Fの研究課題の発表に対するJのフィードバックに着目し、その内容区分(質問, 感想, 提案)とその結果(受入, 拒否, その他)の分類を行い、その中の提案のやり取りの特徴を分析した。まず、内容区分により、Fの発表に対するJの提案がフィードバック全体の半数以上を占め(表2)、Jはビジターセッションにおいて期待されるやり取りを行っていたと考えられる。しかし、その提案の約半数において、提案に対するFの態度が不明瞭であった(表2)。

次に、会話データを検討した結果、Jは、①断定緩和の配慮表現(野田 2024)を多用し(例(1)), ②比較的短い発話で段階的に繰り返し(例(1)), 非言語的

手段も援用しつつ（例(2)）、提案を行っていた。J が複数の場合、③J 同士のやり取りで F に提案を行っていた（例(2)(3)）。一方、F は、聞き手行動は観察されるものの、④J の提案に対する自らの態度を明確に表明する発話が欠落したり（例(1)(2)）、提案を受け入れない場合に理由を説明する発話が、中途終了であったり非流暢性が発生したりしていた（例(3)(4)）。

以上の特徴から、J が共話的に話した場合（水谷 1993、嶺川 2001）、J の人数に関係なく、F が聞き手行動のみの聞き手か傍参与者となり、不均衡な参加の状態（大場 2006）に繋がったと考えられる。具体的には、J が 1 人の場合、共話的な話し方は成立せず、J の短い発話による提案が継続することに繋がったと考えられる。J が 2 人以上の場合、共話的な話し方が J 同士で成立し、J 同士のやり取り（熊谷・木谷 2006）が継続したと考えられる。さらに、F の発話が J にとって提案に対する反応として不明瞭である場合、J の発話に配慮表現が増加し、提案が継続したり、再度行われたりした（例(3)(4)）可能性もある。つまり、表面上は J と F のやり取り自体は成立しても、そのやり取りは発表やレポートの改善のための提案としては十分に機能していたとは考えにくい。結果として、最終発表やレポートにもビジターセッションのやり取りが反映されないことに繋がったと考えられる。

以上を踏まえ、今後のビジターセッションの前後において、参加者 F、J 双方を対象とした提案の産出と理解についての指導の重要性が指摘できる。F には、J による提案の発話の特徴や配慮表現の解釈を説明し、J のフィードバックに対する反応を明示し、その理由も合わせて明確に伝える練習が求められる。J には、言語によって異なる配慮表現の仕方を認識させ、F が理解しやすいように提案の仕方の調整を考えさせることが挙げられる。

<注>

1. 文字化の規則は次の通りである。

ー	母音の引き延ばし	↑	上昇イントネーション
[	同時発話の開始部分	、	1 秒未満のごく短い区切れ

／	発話等の挿入部分	()	非言語行動や特記事項
×	聞き取り不能の発話	(発話)	不明瞭な発話

< 謝辞 >

本研究は, JSPS 科研費 23K00704 「日米大学隣接環境での複数言語使用の実態分析: 語学教育への応用を目指して」(代表者: 竹田ら) の助成を受けている。

< 引用文献 >

大場美和子 (2006) 「三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割ー接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析ー」村岡英裕編『多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.4 社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第 129 集』, pp.37-56.

<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900116818/> (2025 年 9 月 1 日)

熊谷智子・木谷直之 (2006) 「三者面接調査における回答者間の相互作用ー同性の友人同士の場合ー」『日本語科学』 20, pp.47-65.

<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2179> (2025 年 9 月 1 日)

野田尚史 (2014) 「配慮表現の多様性をとらえる意義と方法」野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性ー歴史的变化と地理的・社会的変異』, pp.3-20, くろしお出版.

水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』 12(4), pp.4-10, 明治書院.

嶺川由季 (2001) 「大学院のゼミ談話で見られる日本語母語話者の「対話」と「共話」の使い分け」『社会言語科学』 3(2), pp. 39-51.

https://doi.org/10.19024/jajls.3.2_39 (2025 年 9 月 1 日)

Watanabe, S. (1993). Cultural differences in framing American and Japanese group discussions. In D. Tannen (Ed.), *Framing in discourse* (pp.176-209). Oxford University Press.